

そのひとりを 最も尊ばれるイエス様

マルコによる福音書5章25～34節
2023年1月29日
松田 基子 師

イエス様は神の御子でありながら、人類に神様の愛を具体的に知らせるために、人の世に人の子となって生まれてこられ、神様の愛の実体を現されました。一方当時のイスラエルの民と言うのは、神様の選びの民である事を誇り、その証として律法が与えられ、律法を守っている事を自負していました。しかし、その実体は、律法で相手を計り合う、律法監視社会を築いていました。

律法学者は律法に、人間的な解釈を加えて、こと細かに成すべき事、してはならない事を指導しました。律法は、

『神様を愛し、聴き従い、隣人を愛し、自然を大切に作る社会を築いて行くために与えられたものですが、

『人間はその心の根に、自己中心と言う根』を持っているために、善きものが与えられても、それを曲げてしまうのです。それが律法で相手を計り、律法監視社会をつくってしまう結果となりました。その様な人間の罪深さは、今日も同じです。社会通念、地域の常識、伝統、と言った物差しで周りの人々を計って人格を傷付け否定するのです。

イスラエル社会では、律法を表面的にでも守っている人々が、神様に愛されている者で、生活上、或いは様々の理由で律法を守れない人、守らない人を罪人と呼んでいました。そして自分達の共同体からは排除しました。代表的な人々に、徴税人がいました。

『彼らは支配国である異教徒ローマ人の手先となって異教徒に仕えているからだ』と考えました。また、明らかに律法を犯している遊女がそうでした。また、遊牧生活で、安息日や清めの儀式を守れない、牧羊者、他にも律法を守る生活が出来ない貧しい人々、律法に定め

られた汚れに該当する人々など、自分達とは違う少数者を排除する社会でした。

その様な社会は、イエス様時代のイスラエルばかりでなく、何処の国にも見られます。

『人間の自己中心から、自分に居心地の良い社会を求め、自分の意に添わない人々を排除する社会、少数者を締め出す社会』は何時の世もあり、人間の罪を映し出しています。そんな社会に、イエス様は、

『人間の価値は、人間が評価し合えるものではないこと、人間は神の像に造られたものであり、神様がご自身の御計画によって一人ひとりに**使命を与え、掛け替えのない存在として、世に送り出して**おられること』をお示しになりました。

イエス様はルカによる福音書、19章10節で、「**人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである**」と、言われました。神様にとって、イエス様にとって『**全ての人**が**愛され、尊ばれるべき存在**』でした。イエス様の地上の**生涯はこの事に終始**しました。

さて、イエス様は、マルコによる福音書5章で、ガリラヤ湖を渡って異邦人の地、ゲラサ人の地に行かれ、汚れた霊に取り憑かれ、墓場を住まいとし、昼も夜も、墓場や山で叫んだり、石で自分を打ち叩いたりしていた人に、出会われました。彼は暴れたのでしょう。度々足枷や鎖で、縛られたとあります。ところが、それも引きちぎり、砕いてしまうという、誰にも手に負えない存在でした。人間社会からは排除されて当然とされていた人です。しかし、イエス様はその人の、やり場のない苦しみや怒り、持ち堪えられなくて叫び出さずにはいられない心の苦しみを分かって下さいました。イエス様は彼を深く憐れんで、神の子の権威をもって、

「**汚れた霊、この人から出て行け**」と命じられました。汚れた霊は豚の中に乗り移り、湖になだれ込み溺れ死んでしまいました。

人々は、ひとりの人間性を失った人が、人間性を回復した価値よりも、豚の損害に心を奪われて、イエス様に、

『出て行って下さい』

と頼んだのです。人間は人間でありながら、自分の価値も他人の価値も分からないでいます。イエス様だけが、神様に造られた人間の価値をご存知で、失われた人間を探し求め続けられました。

5章21節で、イエス様は再び舟に乗って、帰って来られました。そこには、イエス様の帰りを待ち受けていた多くの人々がいました。イエス様が舟からあがられ、湖のほとりに立たれると、イエス様の帰りを今か、いまかと待っていた会堂長のヤイロが、イエス様の許に走り寄り、足元に平伏して、

「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやって下さい。

そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう」

と懇願しました。イエス様はヤイロのイエス様に賭けた真剣な願いを受け入れ、ヤイロと一緒に、彼の家に向かわれました。

しかし、その前にイエス様に捜し出され、人生が変えられた女性がいました。24節には、

「大勢の群衆も、イエスに従い、押し迫ってきた」

とあります。そのところに、25節を見ますと、

「さて、ここに12年間も出血の止まらない女がいた。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであつた」

とあります。当時、律法によりますと、女性の出血は、レビ記15章に記された宗教的な汚れに当たりました。今日の人権意識からは考えられない事ですが、当時の宗教家達は、

「宗教的汚れは、触れることによって伝染する」

と考え、汚れを負っている者は集団に近付くことを許しませんでした。女性はその事を良く承知していました。しかし、彼女はここに至るまでに

12年間もの長い間、出血が止まりませんでした。何としても治りたい一心で、多くの職業医者にかかりました。名医の噂を聞けばあちらに、こちらに、治療を受けに行きました。その様な事は、経済的に余裕のある人にしか出来ません。彼女は多分資産のある寡婦であつたであろうと推測されています。

しかし、どんなにお金があつても、病に明け暮れると言う事は苦しみです。それに、汚れた者として、これまで所属していた共同体から、排除されてしまいました。それは大きな屈辱でした。彼女は一日も早く、元の交わりの中に戻りたいと、高いお金を払って、あちらの医者、こちらの医者にかかったのです。しかし、病状は一向に改善しません。悪化するばかりでした。そればかりではありません。財産を使い果たし、生きて行くことそれ自体が脅かされていました。

絶望の淵に立たされた彼女の耳に、イエス様の噂が聞こえてきました。

『イエス様は、貧しき者、低き者、病める者、どの様な人々をも、人間として尊び、その語られる言葉には、人の心を癒す力があり、絶望的な病の人を癒されている』

と聞いたのです。彼女はイエス様のその様な噂を聞いて、

『その様なお方はきっと、神様がお遣わしになった、神様が働いておられるお方に違いない』

と確信しました。この女性は、お金にも、医者にも、親戚にも、友人にも見放されてしまった時、人の世の儚さ、人間が如何に当てにならないものであるかを、経験しました。しかし、彼女はそこで、絶望しませんでした。彼女は、命の与え主である神様に気付きました。

生まれた時から創造主である神様を教えられてきたことは、幸いでした。出血症になるまで、律法を守る生活をし、

『汚れてはならない』

と、一生懸命に清めの儀式を守って来たのです。しかし、今、病を得て、それは自分の努力で治る

ものではありません。

『神様は憐れみ深いお方です。あのイエス様は、正しく神様がお遣わしになった、神の人に間違いない。イエス様は神様の憐れみをもって、人々を癒しておられる。私もイエス様によって癒されるに違いない。イエス様に直接手を置いて戴かなくても、その御衣の裾に触る事ができたら、癒されるに違いない』と確信しました。

彼女はイエス様によって癒される事を確信すると、最早、律法の戒律である、
「**宗教的に汚れた者は、人々に近付いてはならない**」
との、戒めは、神様の御心とは思えませんでした。『神様はこの私をも愛し、イエス様を遣わしてくださった』との思いに変えられたのでした。そんな思いをもって、彼女はヤイロ同様、イエス様が帰って来られるのを辛抱強く、待っていたのでした。

彼女はヤイロがイエス様に、娘の病の癒しを懇願する姿を、深い同情を持って見守っていました。当時の女性蔑視の社会で、周囲からは汚れの身と見なされていた彼女は、ヤイロのように公衆の前で、男性教師のイエス様に、懇願する事は許されていませんでした。彼女は、イエス様の衣に触りたいのです。その為には、イエス様のそばに行かなければなりません。彼女はイエス様に押し迫る人々を、何とかかき分け、手を伸ばして、イエス様の衣に触る所まで、必死に進みました。そして、彼女は、イエス様の衣に触れる事が出来たのです。

28節には、
「『この方の服にでも触れれば
いやしていただける』
と思ったからである」
とあります。詳訳聖書には、
「『あの方の御衣に触りさえすれば、
丈夫になれる』
と何時も言っていたのである」
と訳されています。

「何時も言っていた」

それは、彼女の確信であり、イエス様に対する信頼、信仰でした。29節に、

「すると、すぐ出血が全く止まって、
病気が癒されたことを体に感じた」

とあります。身体は正直です。病の癒しをはっきり感じ取りました。彼女はイエス様に対して抱いた信頼、信仰が余りにも鮮やかに実現したので、喜びと共に神様に対して、イエス様に対して、恐れのが念が湧き上がってきました。

身体の変化は、癒された女性だけではありませんでした。30節に、

「イエスは、自分の内から力が出ていった
ことに気づいて、群衆の中で振り返り、
『私の服に触れたのは誰か』」

と問い掛けられました。イエス様は御自身に対する信頼、信仰を一番大事にされました。それは神様に対する信頼、信仰の表明だからです。イエス様が人の子となってこの世に生まれて来られたのは、罪によって断絶した、神様と人間との関係を、その原因である罪を贖って、人間が再び神様に全信頼し、神様に聴き従う者になるためでした。

神様が人間に一番求めておられることは、神様に対する信頼、信仰です。ですから、イエス様は御自身に対する信頼、信仰を見逃される事はありませんでした。その様なイエス様の御心が分からない弟子たちは、31節に、

「群衆があなたに押し迫っている事が
おわかりでしょう。それなのに、
『誰がわたしにふれたのか』
と仰るのですか」

と言っています。弟子たちにはイエス様が言われた本当の意味が分かりませんでした。イエス様は弟子たちの言葉を聞き流して、
『ご自身に触れた者を見つけよう』
と、辺りを見回しておられました。

イエス様は御自分の内から、力が出ていった事を感じられたのですが、その事は相手に、イエス様に対する信仰があった事の表れです。

しかし、**信仰**というのは、イエス様と対話し、**人格的な関係に至って初めて、生ける信仰となります。** 信仰とは静止した考え、思いではありません。それは**イエス様との生ける交わりから生まれる、イエス様との対話があつて初めて、生きた信仰**と言う事が出来ます。そのためにイエス様はご自身に対する信仰を抱いて、手を伸ばし、服に触れた人を探されたのです。

33節を見ますと、

「**女は自分の身に起こったことを知って
恐ろしくなり、震えながら進み出て平伏し、
すべてをありのまま話した**」

とあります。イエス様は必ず癒して下さると信じて触ったのですから、その通りに癒された時、自分の信仰を誇る人なら、

『やっぱり私の考えに間違いはなかった』と、誇るでしょう。しかし、彼女は**神様の赦し、イエス様の受入がなかったならば、癒しは起こらなかったことに気付いていました。**ですから、彼女は、なんと畏れ多いことだとおののいていました。この時イエス様は、決して咎める様な問い方はなさらなかった筈です。彼女は、イエス様が自分を捜し求めて下さる愛の眼差しに答えて、勇気を出して、進み出て、イエス様の前に平伏し、全てをありのままに証したのです。

するとイエス様は、34節で、

「**娘よ、あなたの信仰があなたを救った。
安心して行きなさい。もうその病気に
かからず、元気に暮らしなさい**」

と励まされました。何と言うイエス様の深い愛でしょう。ここで、

「**あなたの信仰があなたを救った**」
と言う言葉に、人間の側の信仰次第で神様を動かせるかの様に思うのは大きな間違いです。イエス様はご自身に対する、それ程の信頼、**信仰を喜んで下さって、女性への励ましとして、彼女を誉めて下さっているのです。**

イエス様はこの様に、社会から見捨てられた

人々に、神様に造られた者としての尊厳を回復して行く為に大胆に、律法から自由になって、人の命、人の存在そのものを尊ばれました。その事は今日の私達にも求められています。**自分自身がイエス様に探し出された者であることを常に自覚したいものです。**そして、接する人々に対して、**イエス様がその人を愛しておられる、尊い存在であることに、何時も立ち帰り、人を人として尊べるように、**

『聖霊によって心を聖めて下さい。』

イエス様の愛の心をお与え下さい』

と祈りましょう。そして、教会がイエス様の愛に結ばれた交わりになるように、祈り求めて参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

罪の中に、滅びの中に向かって居た私たちのために、御子イエス・キリストを贖い主として、この世に送って下さり、私達を見出し、イエス様の贖いによって救いに導いて下さったことを、心から感謝いたします。

何時もその恵みを忘れることが有りませんように、接する全ての人々に対して、イエス様が人を人として尊ばれたことを忘れず、

『イエス様の愛を与えて下さい』

と祈りつつ、互いに愛しあいながら、生きて行く事が出来ますように、聖霊が私達の心を清め、愛で満たして下さい。

愛の源である救い主、イエス・キリストのお名前によって、お祈りを致します。

アーメン。